



TITLE:

大型電手計算機共同利用について (ひろば)

AUTHOR(S):

川端, 親雄

CITATION:

川端, 親雄. 大型電手計算機共同利用について(ひろば). 物性研究 1964, 2(6): 307-308

ISSUE DATE:

1964-09-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/85606>

RIGHT:

ひろば

大型電子計算機共同利用について

川 端 親 雄 (岡大理)

私の所属する岡山大学理学部には1962年9月に計算研電子計算機NEAC-2203が導入されました。物理学研究の道具として電子計算機が重要な役割を演ずる私のような場合、現在使用している電子計算機には、記憶容量、演算速度、入力装置等の金物に限界があつて、研究上支障を生じているので、大型電子計算機の使用を強く希望してきました。もちろん、この事実は私個人の問題だけでなく、地方の多数の研究者間共通の希望であると思います。幸いにも、関係者のお骨折りによつて全国共同利用の目的で、大型電子計算機が東京大学に設置されることを下記の印刷物で知りました。

- 1) 有馬朗人 科 学 33 (1963) 450
- 2) 小野 周 科 学 33 (1963) 589
- 3) 高木修二 物性研究 1 (1963) 249
- 4) 小野 周 物性研究 1 (1964) 409
- 5) 小野 周 日本物理学会誌 19 (1964) 303
- 6) 森口繁一 運営状況依頼書 1964.6

当分、大型電子計算機設置の見込みのない私達は、中央に設置される大型電子計算機の共同利用実施期日、使用申込手続、地方計算センターの窓口問題、地方研究者の使用割当時間、使用料金、デバッグ時間の問題、全国利用希望者に対するプログラミング講習会、入力装置の設置場所等に関心を持っています。一大学の電子計算機の管理運営と全国共同利用の大型電子計算機の管理運営とは、質的な相異点があるかもしれませんが、参考までに、岡山大学の過去2ヶ年間の実状を紹介させていただきます。電子計算機は理学部で管理運営していますが、理学部外の学内研究者の利用希望も多数ありますので、利用者の全学的な声を反映しながら電子計算機を運転しています。プログラミングからパンチ、デバッグ、オペレートにいたるまで研究者の責任で使用するオープン制ですが、電子計算機に実際タッチする人は、講師、助手、大学院学生達

ひろば

です。例外として、教授、助教授も積極的に電子計算機の使用にタッチしています。このような現実を考慮して、各学部、研究所に所属する実際の利用者達によつて、利用者間の連絡会 DECUM (Digital Electronic Computer User Meeting) をもち、すでに15回を数えています。そこでは、サブルーチンの開発、改良や数値解析の勉強もやつていますが、電子計算機使用申込手続の合理化、使用時間割当の改善、使用料金の問題など事務的なことから、電子計算機メーカーの機械保守に対する苦情や、電子計算機スタッフの利用者に対するサービスのこととか、電子計算機使用上の発生する諸問題を話し合い、電子計算機の管理運営運転が円滑になるよう努力しています。今後、大型電子計算機の共同利用に関する重要な具体的諸機構が確立されるでしょうが、全国共同利用という名目で導入されるからには、地方の利用希望者の声も、十分に反映していただき、名実ともに具わつた全国共同利用の電子計算機としての運営を希望いたします。

「物性研究」の編集について

堀 淳 一

最近「物性研究」への投稿がやや偏つて来たように見受けられます。またきくところによりますと、原稿の集まりが非常に悪いという話です。このことは或は「物性研究」というようなものは必要がないことを意味しているのかも知れません。しかし「物性研究」の発刊を推進された方々はこれが是非必要であると考えられた筈で、それが根拠のうすいものだつたということは考えにくいことです。私は発刊にあたつてどのような議論がなされたか殆んど知らないのですが、それとは別にやはり必要だと思つています。その理由は或は京都で考えられた理由と大部違つているかもしれませんが、誌名を「基礎物理」にしようという意見もあつたという話、その他もれ聞いたところから想像しますと、くかけ離れているわけでもないようです。何れにしても、物性研究が早くも物性論研究と同じ運命を辿るのは困つたことだと思うので、お役に立つかどうか